



|                  |                                                                                           |
|------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------|
| Title            | 心理－社会的現象としての「ひきこもり」 : 1990年代後半の若者たちの生活体験をめぐって                                             |
| Author(s)        | 村澤, 和多里; Murasawa, Watari                                                                 |
| Citation         | 北海道大学大学院教育学研究院紀要, 132, 75-97                                                              |
| Issue Date       | 2018-08-30                                                                                |
| DOI              | <a href="https://doi.org/10.14943/b.edu.132.75">https://doi.org/10.14943/b.edu.132.75</a> |
| Doc URL          | <a href="https://hdl.handle.net/2115/71468">https://hdl.handle.net/2115/71468</a>         |
| Type             | departmental bulletin paper                                                               |
| File Information | 060-1882-1669-132.pdf                                                                     |



# 心理—社会的現象としての「ひきこもり」

—1990年代後半の若者たちの生活体験をめぐって—

村澤 和多里\*

**【要旨】** 本稿では、1990年代後半から心理—社会的な問題として注目されるようになった「ひきこもり」という現象について、心理学的側面と社会学的側面のそれぞれを概観し、それらを総合的に理解する枠組みを提示することを目的とした。

心理学的側面については、自己愛パーソナリティやシゾイドパーソナリティとの関連が指摘されてきたが、近年では発達障害との関係も注目されている。これらに共通する特徴は、「自己の脆弱性」と「過度の自己コントロール」である。また、この現象の社会学的側面としては、日本における思春期の親密性の質的变化、巧みな社会的排除のメカニズム、就労構造の変化などが挙げられる。

本稿では、Young, J. (1999) の「排除型社会」の理論を参考に、心理学的側面と社会学的側面を包括的に理解する枠組みを提示した。

**【キーワード】** ひきこもり 脆弱性 自己コントロール 排除型社会

## はじめに

長いあいだ「ひきこもり」を体験してきたある女性は、自分のことを「グレゴール・ザムザ」と評した。いうまでもないことであるが、Kafka, F. の小説『変身』(Kafka 1915) の主人公のことである。ある日突然、ザムザは異形の生物に変身してしまい、周囲に姿を見られまいとして部屋のなかにひきこもった。その女性も、自身のことを周囲とは異質な存在であると感じて長い間ひきこもっていたのである。

「ひきこもり」について考える時に、私はしばしばKafkaの世界に迷い込んだような気持ちになる。Kafkaの未完の小説に『城』(Kafka 1926) があるが、その世界は「ひきこもり」の若者の世界を彷彿とさせるからである。物語は次のように始まる。

ある冬の晩、主人公のヨーゼフ・Kは、ヴェストヴェスト伯爵の城に測量士として雇われたため、雪深い地方の村へと赴き、城下の宿屋にたどり着く。翌朝、彼は城を目指して歩いていくが、城へ通じる道を見つけることができず、そのうちに日が暮れてしまう。宿屋に戻ると、見知らぬ二人組の男が立っているが、彼らはKを追ってやってきた彼の助手であると言う。助手たちから、城に入るためには許可が必要であると聞かされ、Kは電話で城に許可を求めるが、永久に駄目だという返事が来る。そこに城の長官から手紙が舞い込み、Kを直接雇用するのは村長であるとわかる。Kはトラブルにあいながらもなんとか村長の

\* 札幌学院大学大学院臨床心理学研究科・教授  
DOI : 10.14943/b.edu.132.75

もとにたどり着くのであるが、村長からは現在は測量士を必要としていないといわれる。再び宿屋に戻ったKは、今度は村長の使いであるという小学校教師から、測量士として雇うことはできないが、学校の小使としてなら雇うことができると伝えられる。

ヨーゼフ・Kは職を求めてやってきた青年であるが、結局「城」に入る術を見つけられず、さまよい続けることになる。K自身は懸命に努力し続け、周りの人々の支援を受けているのにもかかわらず、たらい回しにされ続けたまま、迷宮から抜け出すことができない。

Kafkaの世界は、まさに「ひきこもり」の若者たちが生きている世界そのものである。彼らは社会への入り口を求めてさまざまな支援を受けているにもかかわらず、時間の経過とともに入り口は遠ざかっていく。そして実際のところ、支援する側も知らず知らずのうちに村長や小学校教師といった登場人物の役割を演じてしまっているのである。支援の専門家は、「ひきこもり」の若者にさまざまな資格の取得を促すが、その資格を持つ人は企業からは必要とされていなかったりする。そして、本来若者がもともとめていたものとは全く違うアルバイトをすすめたりする。当事者も支援者も、迷宮から抜け出す道をさがしながら、さらなる迷宮を構築し続けている。Kafkaの小説はしばしば荒唐無稽なものとして受け取られるが、すでに私たちにとっての現実もまた荒唐無稽になっているのである。

## 第1節 「ひきこもり」という現象をめぐって

### 1 ひきこもりとは何か

「ひきこもり」という現象は精神保健医療（メンタルヘルス）に関連した心理学的な現象であるとともに、不登校やいじめといった教育の問題とも関連し、「ニート」など若年者の就労問題とも関連した複合的な社会現象でもある。また、ひきこもり支援の枠組みにおいても、こうした問題の複雑さに対応するかたちで従来の領域を横断するような実践が必要になっている。

そもそも多様な状態を一括りにして「ひきこもり」と呼ぶこと自体にも疑問が残るが、本稿では、さしあたって「ひきこもり」についての厚生労働省(2010)のガイドラインに従って「様々な要因の結果として社会的参加（義務教育を含む就学，非常勤職を含む就労，家庭外での交遊など）を回避し，原則的には6ヵ月以上にわたって概ね家庭にとどまり続けている状態（他者と交わらない形での外出をしていてもよい）を指す現象概念である」という定義を参照しておく。ただし、どのような状態を「ひきこもり」と呼ぶのかはその時の社会的状況に依存する側面があり、その定義が流動的なものであることには留意しておく必要がある。

さらに、2010年頃からは、それまで一般的には若年層の問題と考えられていた「ひきこもり」から、中高年の「ひきこもり」が分離されて論じられるようになっていく。従来の「ひきこもり」においては、就労経験がないことが暗黙裡に了解されていたが、就労経験を経て「ひきこもり」に至る例についても注目されるようになってきているという。

このように「ひきこもり」の定義は今後も更新されていくと思われるが、本稿では、1990年代後半に「ひきこもり」として問題化されてきた現象について検討していくため、主に就労経験を経ない若年層を中心に論じていく。

## 2 「ひきこもり」に対する眼差しの異種混淆性

しかしながら、現在までのところ、これら多領域から「ひきこもり」について注がれる眼差しは、統合されることなく異種混淆的に存在しているといわざるを得ない。さまざまな視点から問題が捉えられ、また、さまざまな領域の専門家によって支援が実践されているものの、それらの理論や実践を統合する視点が確立されているとはいいがたい。それにもかかわらず、本質的には異なった認識枠組みに基づいているはずの支援技法が一つの実践の中に混在し、無節操につながり合われているというのが現状である。同一の支援団体の中ですら、「居場所」的プログラムにおいては本人のペースを尊重しているにもかかわらず、キャリア支援プログラムにおいては自立の不安を煽り、家族支援プログラムにおいては家族の葛藤を問題とし、団体の理念としては「ひきこもり」を社会的排除の問題として捉えているというように。確かに、これらのプログラムのひとつひとつはその文脈における合理性を追求しており、それらの成果を図る尺度（就職率など）においては一定の成果を上げているかもしれない。しかし、支援の枠組みによって成果を測る尺度もさまざまであり、なにをもって有効であるとするのか検討の余地がある。

これまで「ひきこもり」については、主に精神保健や臨床心理学（以下、これらを広義の「臨床心理学」としてまとめる）の見地からの研究が中心になされてきたが、そこでは「ひきこもり」の「心の問題」にのみ焦点を当てており、社会問題として捉える視点が欠けていた。あるいは、社会的排除と関連した問題であるという認識も、「個人の社会的（ソーシャル）スキルの問題」という奇妙なかたちで個人に還元されてしまったように思われる。これまで「ひきこもり」について、さまざまな施策が打ち出されているが、そのどれもが対症療法的であり、「ひきこもり」についての社会不安を解消するためにその場しのぎで打ち出されたものであるといわざるを得ない。それらは、社会構造的視点を欠いたまま、「ひきこもり」の若者への就労支援実績の向上や、若年無業者数の低下のみが目標として掲げられているのである。

「ひきこもり」という現象について心理的側面と社会的側面とを架橋する見地から理論構築する試みは、すでに社会学においては着手されてきており、一定の成果をあげている（荻野 2007, 石川 2007）。しかし、これらの研究がそれぞれに有意義なものであるにもかかわらず、その後の支援実践に反映されているとはいえ、公的なひきこもりの支援枠組（厚生労働省 2010）においてはむしろ個人の心理的要因を重視するようになってきている。このような溝が生じている背景としては、「ひきこもり」についての認識枠組みにおいて、依然として個体主義が根深く、社会的要因を許容する理論を構築し得ないでいることが挙げられるであろう。いや、むしろ個人主義的な傾向は強まってきているようにさえ感じられる。本稿では、荻野や石川の研究も参照にしながら、「ひきこもり」という現象の検討を通して、臨床心理学そのものもつ問題点についても光を当てていきたい。

## 3 「心の問題」の社会・歴史的性質

これまでにも指摘されてきたように、心理学は個人の「内面」を仮定し、その内的論理を明らかにすることを目的に発展してきた（Wertch, J. V. 1998, Holzman, L. 2009など）。そこでは、社会性や歴史性は捨象され、私たちの「心」の普遍的な法則が探求されてきた。このようなパラダイムも近年は発達心理学を中心に崩れつつあるが、臨床心理学の領域においては未だに堅固でありつづけており、むしろ、斎藤（2003）が指摘するように「心理学化」の進展によって「内面」

への信仰は強化され続けているとあってよい。

しかしながら、摂食障害や「ひきこもり」などの例においては、これらの心理的現象が社会性や歴史性と切り離せないことは明白である。これらの現象が社会状況の変化によって生じ、ある時期に急速に問題化されていったことは周知の事実である。それにもかかわらず、臨床心理学においてこれらの現象を社会変動と関係させて理解する糸口は未だに立っていない。長い間、臨床心理学においては精神分析学を背景にした家族関係論が強い影響を持ち、愛着や自立の問題、あるいは父性の欠如といった概念で不適応の心理的メカニズムを捉えようとしてきた。さらに、近年の臨床心理学（そして臨床心理学に多大な影響を及ぼし続けている精神医学）の傾向としては、これらの現象を個人の器質的要因や認知的障害に還元していく方向に向かっている。筆者はこれらの理論にも合理性を認めているが、臨床心理学が個体的要因のみに注目し、社会的要因を理論枠組みに組み込むことができないことは明らかな理論的欠陥であると考えている。このような理論枠組みでは、社会的状況の変化を背景に生じてきた心理学的現象を分析し、また対処していくことは不可能であるからである。

摂食障害を例に挙げると、第二次世界大戦後に西側諸国において食料需給が増大して飢餓の心配がなくなったこと、女性の外見についての社会的評価が変化したこと、女性の社会的地位が変化したことは最低限考慮に入れなければならないであろう。これらについては、むしろ臨床心理学の外側で、社会学（浅野1996、加藤2004）などにおいて盛んに議論されてきたが、その知見は臨床心理学や心理療法の枠組みに吸収されていない。

このように摂食障害についていえることは、本稿で中心的に扱う現象である「ひきこもり」にもそのまま当てはまる。先述のように、むしろ近年の傾向としては、「ひきこもり」という現象を心理学と社会学の狭間に生起するものとして捉えるのではなく、むしろ「心」という個体的要因に還元して捉えようとする傾向が顕著である。

#### 4 本稿の目的

本稿では、上記のような問題意識にたち、「ひきこもり」という現象について心理学的視点と社会学的視点が交差する地点から考察することを目的とする。特に、日本において「ひきこもり」という現象が1990年代後半から問題にされるようになったことの意味に焦点をあてて検討していくことにする。

## 第2節 「ひきこもり」を生み出す社会・歴史的背景

まずはじめに「ひきこもり」という現象が1990年代後半問題化していった過程について概観しておく。「ひきこもり」という現象は、突然出現したわけではなく、それに先行する心理的・社会的現象から、それまでとは異なった性質をもつ一群として徐々に分化していったと考えられる。なかでも、「不登校」という現象からの分化と、「対人恐怖症」の現代的なタイプへの変容という過程は、「ひきこもり」という現象が注目されていく社会的背景を考察する上でも特に重要であると思われる。

## 1 「不登校」現象との関係

### (1) 教室空間の変質

「ひきこもり」と不登校問題は絡み合っており、後述するように「ひきこもり」の若者の多くが不登校を体験しているというばかりではなく、そもそも不登校問題から派生してきたという経緯が指摘されている。1980年代後半からの不登校児童数の爆発的な増加は、中学や高校での教育期間を修了（中退）した「その後」も外出ができないでいる若者たちを大量に生み出していくことになった。このような若者たちは、すでに義務教育の年齢を過ぎていたため「不登校」とは呼ばず、不登校の「その後」あるいは「ひきこもり」とよばれるようになっていた（高山 2008, 村澤 2017a）。

もともと不登校という現象は1950年代後半から注目され始めたが、当初は学校へ行かない小学生の事例が中心に議論されており、母子分離不安に原因を求める考え方が優勢であった。その後、不登校児童の割合は緩やかに減少していき、この現象に言及する論文も徐々に減少していったが、1970年代後半になって不登校児童の割合が増加に転じた。この頃には、学校に行かない（行けない）という現象は中学生を中心としたものへと変化し、その背景として学歴や学校への捉われを特徴とする「強迫性」が指摘されるようになっていった。さらに、1980年代半ばを境に不登校生徒数は急激に増加し始めていったが、その背景には、1970年代後半から1980年代前半にかけて吹き荒れた校内暴力、その後の暴力沈静化のための徹底的な管理教育、そして1980年代後半から問題化していった教室での「いじめ」が関係していると考えられる。この時期にはさまざまな抑圧的な力によって、学校や学級は守られた空間ではなくなってしまい、友人関係における安全感も急速に失われていったと考えられ、それが、不登校の急増につながったと考えられる（村澤 2017b）。

この急増の中で不登校の性質も変化していった、1980年代後半頃から1990年代にかけて、それまでの母子分離不安を背景にしたものとも強迫的な性格のものとも異なる、「無気力」を特徴とする不登校が指摘されるようになった（鑑 1989, 文部省 1996, 鍋田 1999）。このような性質の変化は、そのまま「ひきこもり」に指摘される回避的傾向へと結びついていると言えるであろう。

### (2) いじめ問題と不登校

また、「ひきこもり」の若者の多くが「いじめ被害」を体験しているが、これについても不登校との関係を見捨てることはできない。

1980年代後半から不登校の背景として「いじめ」という問題が指摘されるようになっていったのであるが、この時期は、わが国において「いじめ」が注目を浴びるようになった時期と重なっている（森田（洋）2010）。不登校といじめとの関連については1980年代後半から指摘されはじめており、本城（1988）は、「いじめ」との関連に着目してそれまでの不登校についての報告をまとめ、「昭和40年前後に発表された高木ら、若林らの報告に比べ昭和60年前後に発表された小松ら、武井らの報告では登校拒否の発生契機として「いじめられ」体験を有するものの割合が増加を示している」と述べ、「近年学校状況において「いじめ」の問題が深刻化しており、「いじめ」が登校拒否発症の要因として重要性を増してきている」ことを指摘している。佐藤（1987）や若林（1992）も従来に比べていじめを背景とした不登校が増加しているという認識を示した。

### (3) 傷つき体験と無力感

前2項では、1980年前後から中学校という空間がさまざまな暴力の舞台となっていき、安全感が失われていったことが不登校の急激な増加を招き、ひきこもりという現象を準備したことを指摘した。ひきこもりの若者たちの多くは中学校での「いじめ被害」や不登校の体験を有しており、その影響で、できる限り人と接触しないようにキャリア形成していく。さらに、多くのひきこもりの若者たちは長い間過去の傷つき体験にとらわれ、新たな自己を成長させていく機会をのがしてしまっている(村澤 2017a)。

これらのことから言えることは、「いじめ被害」という体験が看過できないほど大きな要因として存在しているということである。しかし、「いじめ被害」という体験とひきこもりを直接的に結び付け、心的外傷論(Herman, J. L. 1992, van der Kolk, B. A. et.al 1996)の枠組みで捉えることには慎重になるべきであろう。ひきこもりの若者たちが語る「いじめ被害」の内容は、身体的あるいは心理的に攻撃されたという経験よりも、無視あるいは放置されたという経験のほうが多く語られているからである。無視や放置という体験から生じる「無力感」についての理解が必要である(村澤 2013)。

## 2 現代型対人恐怖症としての「ひきこもり」

精神医学においては、「ひきこもり」を現代的な対人恐怖症の類型として捉える見方も提示されている。

そもそも「ひきこもり」に見られるような過剰な自己コントロールという特徴は、対人恐怖症においては、以前から指摘されてきたものであり、森田療法の創始者である森田正馬(1932)が古典的対人恐怖症における「精神交互作用」として指摘されてきたものと合致する側面も大きい。つまり、対人的接触によるリスクをなんらかの手段によってコントロールすること自体は、古典的な手法であるということが出来る。ただし、中村(2007)によると、対人恐怖症は時代によって症状が変遷しており、「ひきこもり」はこの変遷の延長線上にあると考えることができるのだという。

対人恐怖症概念の形成は、森田(正)(1932)が「赤面恐怖(対人恐怖)は、自ら人前で恥ずかしがることをもって苦悩する症状」でありその本質は羞恥恐怖であると指摘したことによって先鞭がつけられたとされる(中村2007)。その後、戦前までの対人恐怖症の中心は赤面恐怖や正視(自己視線)恐怖などであったが、1970年前後になると西田(1968)によって、赤面恐怖の減少と視覚的・臭覚的關係念慮の増加が報告され、対人恐怖の背景となる心性が<恥>から<怯え>に変化していると指摘された。その頃から、自己臭恐怖症や醜形恐怖症、自分から「菌」などが漏れ出して周囲に迷惑をかけているといった「自我漏洩症候群」(藤縄 1972)など、次々と妄想的確信を伴った「妄想型」「重症型」の対人恐怖症について言及されるようになっていった(植元ら 1967, 山下 1970, 笠原ら 1972など)。なお、朝倉(2012)は、これらの対人恐怖症概念と社会不安症の関係について図1のようにまとめている。

その後も、田中ら(1994)や堀井ら(1995)によって、1981年から1993年の間に、中高生の対人不安意識に量的な顕著な増大が認められ、対人恐怖症の重症化がその後も続いていることが指摘されたが、1990年代にはいると対人恐怖症にさらなる質的な変化が指摘され始める。中村(2000)は、「引きこもり」など対人的な不安が生じる場面を徹底的に回避するタイプの対人恐怖が増加しており『「重症型」よりさらに未分化な対人不安がむきだしになったかのようである』

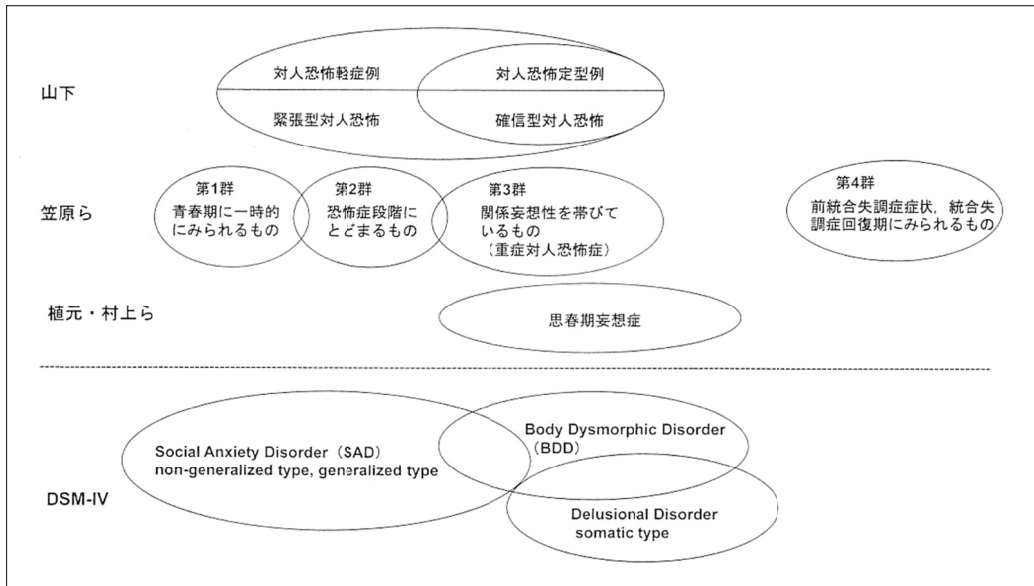


図1 対人恐怖概念とDSM-IV (朝倉 2012)

と指摘している。また、鍋田(1997)も同様の傾向を認めており、それらの背景に「人とつながれない、あるいは、情緒的な絆を人と持ったことがない深い絶望感とも空虚感とも恐怖感」を指摘している。

このような対人恐怖症の変遷を振り返ると、初期の赤面恐怖や正視（自己視線）恐怖においては、他者の眼差しに映る自己像をコントロールすることが問題となっていたが、1970年前後から指摘されはじめた「妄想型」「重症型」においては、他者の眼差しが届かない自己の領域にまでコントロールの範囲が及び、コントロールの破綻が恐怖という形をとって表れるようになったと見ることができるであろう。それでも、何とか対人関係の中に留まりながら不安や恐怖をコントロールしようとしていたのが「重症型」であったと考えられるが、「回避」「ひきこもり」を特徴とする対人恐怖症においては、もはや対人関係の中に留まることができなくなっていると考えることができる。精神分析の概念を用いて説明するならば、初期の赤面恐怖においては内なるやましい欲情を抑え込もうとする「抑圧」が主題となっていたのが、「重症型」においてはコントロールを目的とする「強迫性」が主題となり、近年はまさに「回避」あるいは「解離」が主題となっていると捉えることができる。

中村（2007）はこのような対人恐怖症の変遷について、社会状況の変容との関係を考察している。中村は、地縁の共同体が機能していた時代には「周囲に不快や迷惑を及ぼす結果、親密な共同関係から排斥されはしないか」という他者に対する配慮からくる不安が強かったが、近年は共同性がほぼ解体し、他者との接触においては「配慮」ではなく「闘争か逃走か」という原始的な防衛反応への回帰が見受けられると指摘している。

### 第3節 心理的問題としての「ひきこもり」

前節では、「ひきこもり」という現象が他の心理・社会的な現象から分離していく過程について概観した。そこでは「ひきこもり」という概念は流動的な側面を持つものであったが、他方では、1990年代後半からの議論では、一定の心理的特性が指摘されてきた。

本節では、この1990年代後半から注目を集めるようになった「ひきこもり」の若者たちの心理的特性について精神保健や臨床心理学の領域でどのように論じられてきたのか概観する。ただし、詳しくは別稿（村澤 2017a）で論じているのでここでは要点をまとめることにとどめる。

#### 1 パーソナリティ障害とひきこもり

ひきこもりの若者たちに共通するパーソナリティ特性について、多くの論者は自己愛パーソナリティやシゾイドパーソナリティ特性が認められることを指摘してきた（小此木 2000, 藤山 2001, 衣笠 1999）。近藤（1999）も「引きこもりをきたすケースの精神医学的背景はかなり多様です」と述べた上で「引きこもりケースを理解する上で重要な鍵概念」として自己愛パーソナリティ、シゾイドパーソナリティ、強迫性を挙げている。それぞれの特徴を簡単にまとめておく。

自己愛性パーソナリティ障害の基本的特徴は、「誇大性、賛美されたいという欲求、共感性の欠如の広範囲な様式」であるとされている（APA 2013）。しかし、近年は、顕在的（overt）で周囲を気にかけない（oblivious）タイプと、潜在的（covert）で過敏に気にかける（hypervigilant）タイプという2つに大別するようになってきている（Wink, P. 1991, Gabbard 1994）。ひきこもりとの親和性が指摘されているのは、後者のタイプで、過剰に傷つきやすく、失敗や恥をかくことを恐れるために人前に出ることを避けることが特徴であるとされている。

強迫性パーソナリティ障害の基本的特徴は「秩序、完璧主義、精神および対人関係の統制にとらわれ、柔軟性、開放性、効率性が犠牲にさせること」であるとされている（APA 2013）。Gabbard（1994）によると「かなり強い自己不信」に苦しみ、価値あるものとして認められるために完璧さをもとめると指摘されている。

シゾイドパーソナリティ障害の基本的特徴は「社会的関係からの離脱、対人関係場面での情動表現の範囲の限定の広範な様式」であるとされ、親密な関係性に対して無関心であるように見え、他者との対人関係をつくらない孤立した行動様式をもつとされている（APA 2013）。

#### （1）自己の脆弱性

これらのパーソナリティ障害に共通して指摘されている特徴は、脆く傷つきやすい未熟な自己を有しているという点である。いずれのパーソナリティ障害においても他者との関わりは自尊心を傷つける可能性のあるリスクとして体験されており、そのリスクへの対処戦略が、回避を中心とする「ひきこもり」という形態をとっていると捉えることができる。

しかし、それぞれのパーソナリティによって、ひきこもりに陥るパターンには違いがあることが予想される。他者との接触というリスクに対して最も脆弱であると思われるのはシゾイドパーソナリティ障害で、彼らにおいては自己意識と他者意識との境界（自我境界）が危ういため、他者との接触によって自己が「飲み込まれる」不安が喚起され、それを回避するためにひきこもりに陥ってしまうと考えられる。

## (2) 過剰な自己コントロール

強迫性パーソナリティ障害や自己愛パーソナリティ障害においては、他者との接触の回避よりも、自己評価を安定させるような戦略のほうが優勢であると考えられる。強迫性パーソナリティの場合は、自己意識を脅かす不安をコントロールすることに腐心しており、そのあまりに過剰内省に陥り、結果的に更にコントロールが破綻するのではないかという不安に捉われていくことになっていくという悪循環に陥っていくが、コントロールの破綻が現実的になった時にそれ以上の破綻を防ぐために回避やひきこもりに陥ると考えられる。また、自己愛パーソナリティにおいては、自尊心が傷つけられた場合、空想的な誇大自己を呼び覚まして自尊心を回復させると同時に、それ以上自尊心を低下させるようなリスクのある社会的関係を徹底して切断するようになるために、冷淡で尊大な態度になっていくことが考えられる。

## 2 自閉スペクトラム症との関係

自閉スペクトラム症（従来の「広汎性発達障害」「アスペルガー症候群」も含む）の基本的特徴は「持続する相互的な社会的コミュニケーションや対人相互反応の障害、および限定された反復的な行動、興味、または活動の様式である」とされる（APA 2013）。

自閉スペクトラム症とひきこもりとの関連については、近年多くの指摘がなされている（杉山 2002など）。Gillberg（2002）は「アスペルガー症候群の人の5人に2人が大人になってもひきこもりがちで孤立している」と指摘しており、Simonoff, E. et al.（2008）による英国における疫学的調査にもとづく報告においても、自閉スペクトラム症と社会不安症（SAD）の併存（29.2%）が確認されている。また、近藤（2010）によると、本人が発達障害者支援センターに来談したひきこもりのケースのうち約3分の1が自閉スペクトラム症（広汎性発達障害）を主とした群に分類されたという。

しかし、一般的に自閉スペクトラム症の一次的な障害として「ひきこもり」が挙げられることはなく（APA 2013）、二次的に生じた対処行動であると考えられることができる。近藤（2013）は、自閉スペクトラム症（広汎性発達障害）を持つ人が社会不安症に陥りやすい要因として、他者の意図、状況や文脈、暗黙のルールといったものを汲み取ることができないため漠然とした違和感や不適応感を持ち、そのために対人不安や被害感につながりやすいことがあるのではないかと述べている。また近藤は、自閉スペクトラム症の人における、社会不安症においては彼らの対人的コミュニケーションの特異さが過剰な自己コントロールへと導いていき、対人的リスクを避けて引きこもっていくことも指摘している。

また、自閉スペクトラム症の人は、自己に属する体験と外部に属する体験との境界が曖昧であることが指摘されている（Williams, D. 1992, 佐藤・櫻井 2010, 木谷 2015）。このような特徴は、シゾイドパーソナリティ障害において指摘される特徴と一致している。近年、シゾイドパーソナリティ障害は自閉スペクトラム症との強い関連性が指摘されており、両者を区別することが困難であると考えられるようになってきている（APA 2013, 杉山 2007）。

自己の脆弱性が生じる発達の要因が異なるとしても、前項でのパーソナリティ障害について指摘した、自己が侵襲されるリスクを避けてひきこもっていくプロセスは、自閉スペクトラム症の若者たちにおいても同様に経験されると考えられる。

### 3 リスクへの対処方略としての「ひきこもり」

「ひきこもり」との関連が指摘されてきたパーソナリティ障害においても自閉スペクトラム症においても、その根底に自己評価が傷つけられやすいことや、他者との関係において安定した自己意識を保てなくなるなど「自己の脆弱性」と呼べる傾向があると考えられる。そして、そのような脆弱性に対する防衛的な方略として、この対人関係において傷つけられたり「自己が呑み込まれ」たりするリスクを回避するパターンが生じ、結果的に「ひきこもり」という現象として顕在化していると考えられる。また、この脆弱性が露呈すること防ぐための方略としては、自己を脅かすようなリスクをコントロールする「過剰な自己コントロール」と呼べるような方略も用いられていると考えられる。「過剰な自己コントロール」には、して自己愛パーソナリティに見られるように空想的に自己評価を高めることで他者から否定されることへの不安を軽減させるような方略や、強迫パーソナリティにみられるような自己を脅かすようなリスクを予測してあらかじめ対処しようとするような方略があると思われる。

「ひきこもり」と自閉スペクトラム症との関連については、近藤（2013）が指摘するように、彼らの自己や他者に対する特有の認知のありかたや対人的コミュニケーションの特異さなどのために、過剰な自己コントロールへと捉われていき、結果的に対人的リスクを避けて「ひきこもり」に陥っていくことが考えられる。

パーソナリティ障害と自閉スペクトラム症などの精神保健領域の概念の相互関係について図2に示す。

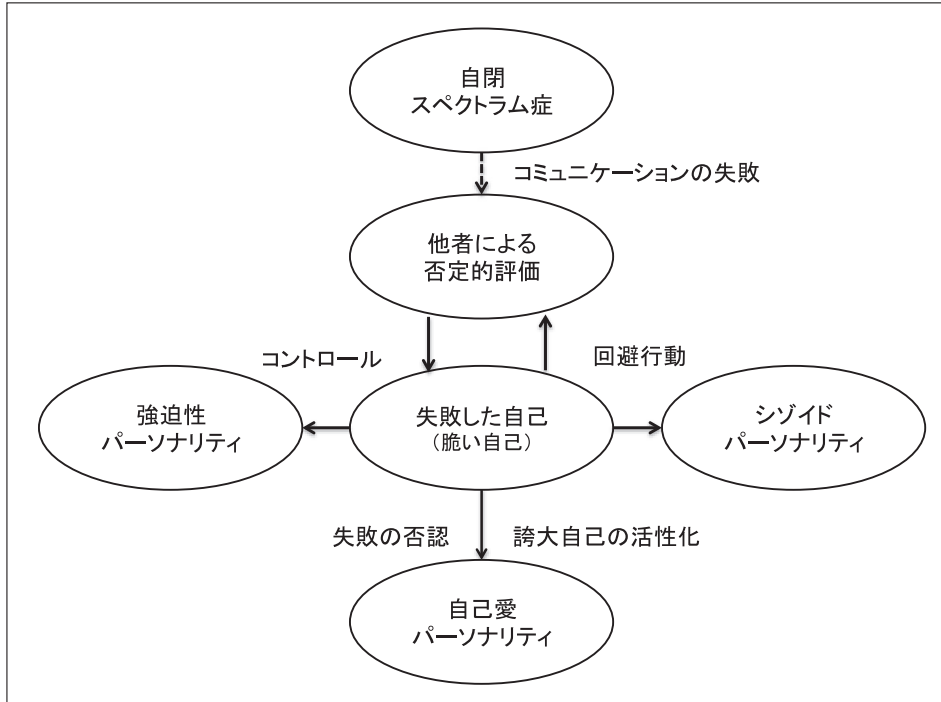


図2 ひきこもりとの関連が指摘される精神保健の概念の相互関係（村澤 2017a）

## 第4節 「ひきこもり」の若者たちの生活体験

第2節では、「ひきこもり」という現象が一つのカテゴリーがとして分化していった経緯を、第3節では、「ひきこもり」というカテゴリーに含まれる若者たちの心理的特性についての議論を概観した。

次に、本節では、若者たちがどのような生活体験を通して「ひきこもり」に陥っていくのかを検討し、社会的な体験が心理的側面に与える影響について検討していくことにする。

### 1 「ひきこもり」の若者たちの生活体験

これまでの公的調査において、ひきこもり状態にある若者たちに共通していた生活体験として「いじめ被害」「不登校」「就労での躓き」が指摘されてきた（厚生労働省 2003, 東京都 2008, 内閣府 2010）。しかし、これまで述べてきたように、臨床心理学において「ひきこもり」とパーソナリティ障害や発達障害との関連性が盛んに論じられてきたのに対して、これらの若者たちに共通した生活体験についてはそれほど熱心に議論されてこなかった。武藤（2001）は不登校やいじめられ体験などの否定的な学校体験との関係を、斎藤（2003b）は「成績の低下や受験・就労の失敗、友達の裏切りや失恋、いじめなど一種の挫折体験」との関係を指摘しているが、それらについて十分に検討しているとはいえない。以下に、これまでの代表的な調査の結果を挙げておく。

#### (1) いじめ被害

東京都（2008）による調査では、「ひきこもり合計群」において「生育環境・学校での経験」という調査項目で「友達にいじめられた（いじめられている）」と答えた者の割合は43.8%（一般群18.0%）であった。内閣府（2010）の調査においても、「ひきこもり群」においては「友達にいじめられた」ことがあると解答した者の割合は42.4%（一般群22.9%）であった。これらの調査結果から、ひきこもり状態にある若者たちの実に40%以上が過去にいじめられたことがあると考えることができる。ここからいじめられ体験が直接的にひきこもりの原因となっていると結論することはできないが、大きな影響を及ぼしていることが予想される。

#### (2) 不登校

厚生労働省（2003）の調査においては、ひきこもり状態にある若者の61.4%が過去に不登校を経験していることが確認されている。東京都（2008）によると「ひきこもり合計群」において「不登校を経験した（している）」と答えた者の割合は34.4%（一般群5.3%）であった。また、内閣府（2010）による調査ではひきこもり群の若者において「不登校を経験した」と答えた者の割合は23.7%（一般群5.4%）であった。このように、いじめられ体験と比較すると、不登校を経験した者の割合にはばらつきがあり、近年の調査ではひきこもり状態との関連性はそれほど高くはないように思われる。しかし、一般群における不登校経験者の割合が5%程度であることと比較すると、ひきこもり状態にある若者における不登校経験者の割合は明らかに高く、不登校経験が後のひきこもり状態に少なからず影響を及ぼしていることがうかがわれる。

### (3) 就労での躓き

厚生労働省（2003）による調査では、ひきこもり状態に至った原因として「職場不適應」と答えている者の割合は28.1%であり、「就職活動不調」と答えている者は12.5%であった。内閣府（2010）による調査では、ひきこもり状態に陥ったきっかけとして「職場になじめなかった」と答えている者は23.7%、「就職活動がうまくいかなかった」と答えている者は20.3%であった。就労や就職活動での失敗体験は、「いじめられ体験」や「不登校経験」に比べてより直接的な原因として解答されている。しかし、いずれの調査においても、就労や就職活動の失敗について答えている者の中には、過去にいじめられ体験や不登校経験を有する者も含まれており、それらの体験がひきこもり状態に何らかの影響を及ぼしている例も少なくないと考えられる。

## 2 透明な排除のプロセス

筆者が行った調査においても「ひきこもり」の若者たちの多くが「いじめ被害」「不登校」を経験していたり、コミュニケーションの苦手さから就職活動や就労場面での挫折体験をしていることが確認された（村澤 2013）。そして、このような状況の中で、それ以上、自己評価を傷つけられないために「ひきこもり」という対処方略を選択していた。

これらの要因はいわば顕在的であり、比較的直接的にキャリアの形成を阻害していくが、これとは別に、表面上はキャリアの形成に影響がないように見えたり、あるいは「不登校体験」によって傷ついたキャリアを修復するような選択に見えながら、長い時間をかけてひきこもり状態へと至らしめるような「透明な排除」のプロセスが見出された。

筆者が見出した「透明な排除」のプロセスには二つあり、一つ目は、表面上は学歴を積み重ねていこうとするが、十分な教育的ケアを受けることができず徐々に自分の存在基盤が希薄化していき、やがて身動きが取れなくなってひきこもり状態に至るというプロセスである。もう一つは、見えない力によって孤立させられていき、やがて自身を存在価値のないものとして認識していき、自ら社会への参加から退いていくようになるプロセスである。これらの体験に共通した特徴は、表面的には排除されているようには見えないが、かといって積極的に存在を承認されることはなく、最終的に孤立させられていくことである。

## 第5節 思春期の自己形成と「ひきこもり」

次に、これまで述べてきたような学校や教室空間の質的な変化や、そこでの生活体験が、思春期における自己形成に与える影響について検討しておく。

### 1 自己の脆弱性

「ひきこもり」についての臨床心理学的理論の検討からは、「自己の脆弱性」と「過剰な自己コントロール」という特性が浮かび上がってきた。また、これらの特性は「自閉スペクトラム症」の特性とも重なり合っていることが確認された。

しかし、「ひきこもり」の若者たちの生活体験をたどってみると、彼らの多くが思春期において自己形成の基盤となりうる同年輩関係を持つことができなかつたことが指摘できる。そのため

に確固とした自己感覚を發展させることができなかつたり、他者への信頼感を体験できていないため自己完結的に不安をコントロールするようになったことも考えられる。彼らは、いじめ被害や不登校、発達障害のリスク、生育環境のリスク、就労体験での傷つきなど、さまざまな形で社会的関係から締め出された体験をしていた。また、彼らはそれぞれの段階で支援を受けようとしているにも関わらず、彼ら自身がさらなる傷つきを回避しようとして選択した道は、結果的に孤立化を深めていくようなものであり、個人と社会との断絶はますます深めていた。このようなプロセスの中で、「ひきこもり」の若者たちは、自己と社会との緊密な関係性は崩壊していくことが考えられる。

確かに「ひきこもり」と「自閉スペクトラム症」の関係は深いと思われるが、それだけで「ひきこもり」におちいるわけではなく、「自己の脆弱性」と「過剰な自己コントロール」という特性が、彼らの生活体験の中で強化されていった側面もあると考えることができるであろう。

## 2 思春期・青年期の質的な変容

これまで述べてきたように「ひきこもり」という現象については、先行する「不登校」「いじめ」という現象との関係を抜きにして考えることができない。1980年前後から中学校という空間がさまざまな暴力の舞台となっていき、安全感が失われていったことが不登校の急激な増加を招き、ひきこもりという現象を準備した。また、ひきこもりの若者たちの生活体験についての調査を通して彼らの多くが中学校での「いじめ被害」や「不登校」の体験を有しており、そこからできる限り人と接触しないようなキャリア形成をしていくことが見出された。これらの事柄から見えてくることは、彼らの多くが思春期において安心できる親密な関係をつくることができなかつたということである。

思春期の自我発達における同年輩関係の重要性については、Blos, P. (1962) や Sullivan, H. S. (1953) によって指摘されてきた。両者の指摘に共通していることは、自己と他者が「同じである」という同質性の確認と、相互が個性的な自立した存在であるということへの尊重とが絡み合いながら自己が形成されていくということである。

このような視点から、ひきこもりの若者たちの思春期・青年期の経験を考えると、「いじめ被害」によって友人関係から排除されたり、「不登校」によって友人との交流が絶たれた場合は、彼らの思春期における自我の再編成の機会を奪ってしまう。そのため彼らは自他の「同質性」を確認することなく自己の「異質性」に捉われ続けてしまうということが考えられる。また、そもそも安全感が失われつつある環境において、「同質性」を確認しつつ「個別性（異質性）」を成長させていくということが困難になっていることも考えられる。

## 3 存在の透明化

もう一つの社会的背景として、文部省（1992）の不登校（あるいは「登校拒否」）に対する認識転換にともなってフリースクールや通信制高校などが整備されていったことも指摘しなくてはならない。皮肉なことではあるが、このルートの整備は一部の若者にとっては、いじめ被害→不登校→フリースクールといった一連の流れの中で存在が「透明化」していくプロセスとして機能してしまったようである。

このようなルートの選択は、はじめは若者たち自身によるものであったかもしれないが、結果的に袋小路に陥ってしまった。筆者の接したある若者は、心理療法によって「人と交わり

ずに社会に参加すること」が可能になることを望んでいた（村澤 2003）。このような生き方を望むことは荒唐無稽であるかのように見えるが、実際の所、人との交わりを最小限にするために通信制の高校へ進学する者も少なくない。人と交わらずに学校を卒業することが可能なシステムが、公的に作り上げられていったのである。しかし、このようなシステムに浸っていくことは、結果的に他者との接触に対する恐怖感をさらに増幅させていく。また、他者との接触がないために、承認を得ることができなくなり、自分が何者かという「アイデンティティ」を確かめることもできない。

確かに、不登校やひきこもり支援のルートが整備されていく中で、あからさまに不登校の児童やひきこもりの若者が排除されることはなくなり、多くの若者にとっては、社会的包摂への道が整備されていったことは評価できる。しかし、見方を変えれば、そのような制度をうまく活用することができるコミュニケーションスキルや就労スキルを持たない人にとっては、自主的に制度を利用しないことを選択せざるを得ないのである。社会に包摂されるか否かは自己責任に帰され、そのような制度を利用しない、あるいはできないということは自己責任において自ら排除されることを選択したことを意味する。ひきこもりにおける社会的排除は、存在を否定されるということよりも、むしろ、「存在しなくてもよいもの」という立場を自主的に選択させられ、やがて「放置」「無視」されていくことに本質的な特徴があると思われる。ひきこもりの若者たちは対人関係からの退却を「自ら選択」していくわけであるが、その結果、彼らは社会の目に触れない「透明な存在」となっていくのである。

ひきこもりを社会的排除の文脈でとらえた場合、あからさまな排除というよりも「包摂」と「排除」の間に宙づりにされ、内部からも外部からも捉えづらい状態に「透明化」されているといえる。権利上は社会の内部に入ることができることになっているが、実際的には内部に入れないような、透明な排除のプロセスが働いているのである。

## 第6節 就労問題としての「ひきこもり」

塩倉（2002）は、2000年代に入ってから、「ひきこもり」という現象は就労問題と結びつけて論じられるようになったことを指摘している。この傾向は、「ニート」の概念の登場によってより強まっていった。

玄田・曲沼（2004）は、「15歳～34歳の非労働力人口（仕事をしていない、また失業者として求職活動していない者）のうち、主に通学でも、主に家事でも無い独身者」を「ニート」と定義し、人口に膾炙するところとなった。本田ら（2006b）によると、この「ニート」というカテゴリーには長期若年失業者（求職者）やフリーターの問題など社会経済的問題として議論されるべき若年者の労働問題と、対人関係や心理的な困難を抱えた若者（ひきこもりなど）の問題の両者が含まれており、統計的にも、労働経済白書によればニート人口（15～34歳）は2004年には64万人であったとされるが、内閣府（2010）は「ひきこもり」状態の若者（15～39歳）は69.6万人と推計しており、両者の重複が大きいことが窺われる。

「ニート」が問題に代表される、若者の就労を取り巻く厳しい状況が生まれた背景としては、直接的には「バブル経済」の崩壊後の不況と、その後、1995年に日経連が発表した「新時代の『日

本的経営』-挑戦すべき方向とその具体策」を皮切りに、雇用の流動化、非正規化が圧倒的な勢いで進行していったことが挙げられる（村澤ら2012）。

また、関水（2016）が「ひきこもり」が問題化してくる背景の一つとして指摘している、戦後の日本で進行していった労働のそのものの構造的変化も大きな要因として考慮に入れなければならない。関水によると、日本において、戦後間もない1953年には農林水産業をはじめとする「自営業」とその「家族従業者」が就業者全体の6割を占めていたのだが、その後急激に減少していき、1959年に5割を下まわり、2015年には1割近くにまで近づいている。裏返せば、戦後間もない頃は4割程度であった「雇用者」（サラリーマン）の割合が急増していき、2015年には就労者の9割が「雇用者」になったということである。また、産業構造としても、1950年頃には第1次産業が5割を占めていたのが、高度経済成長とともに急激に低下し、ついで第2次産業も高度経済成長の収束とともに低下していき、1970年代後半からは第3次産業が5割以上を占めるようになり、さらに近年は7割程度を占めるに至っている。

このような「労働」そのものの構造的変化は、高度経済成長期以前にはあった、学歴や資格に関係なく農業などの家業を手伝うという選択肢をほとんどなくなってしまった。また、第3次産業（サービス業）の占める割合が多くなってきたことは、安定した就労を確保しようとする場合、単純な職業的スキルだけではなく、他者との間で円滑にコミュニケーションを展開し他者と協調して諸作業を行っていく対人能力が必要となっていることを意味する（本田2006a）。

このような社会においては、種々の理由によりそうした適応スキルが欠けていたり、十分に育てていない若者たちが職につくことが極めて困難になってくる。また、就職した場合にも、コミュニケーションスキルの不足から不適應を起こすことも考えられる。

「ひきこもり」の若者たちの場合、就労につながる以前の段階で傷ついてひきこもっている場合も、「就労での躓き」が原因となってひきこもっている場合にしても、雇用者としてサービス業に従事する以外の選択肢が極めて少なくなっているという状況が、身動きのできない状態に陥っていく大きな要因と考えることができるであろう。

## 第7節 結論

ここまで、「ひきこもり」という現象の心理的側面と社会・歴史的側面についてそれぞれ概観してきたが、本節では、さらに社会的排除についての理論と照らし合わせつつ理解を深めていくことにする。

### 1 排除型社会の台頭

犯罪学者であるYoung, J. (1999) は戦後の工業化の進展を、第二次産業によって牽引される局面と、第三次産業によって牽引される局面に分け、そこで生じる人々の心理的側面の変化についても論じている。Youngの理論は「ひきこもり」という現象の成立を理解する上で助けとなると考えられるので、以下に概観しておく。

Youngは、戦後から1960年までの西側社会の政治経済的体制を「包摂型社会」、1970年代以降

を「排除型社会」と呼んでいる。「包摂型社会」とは、第2次産業を中心とした生産様式の下に大量生産・大量消費が実現し、人々は労働者として、また消費者として社会に包摂されていた社会のことである。これに対して「排除型社会」とは、1970年代以降、第3次産業を中心とする生産体制へ移行していく中で、多品種少量生産を実現させるために企業が徹底的な経営の合理化を進め、非正規雇用の増大や「構造的な失業状態に置かれたアンダークラス」が生み出されていくようになった社会のことである。

すでに別のところで論じているが(村澤ら 2012)、日本においては、1970年代後半から第三次産業を中心とする生産体制に移行したが、「包摂型社会」から「排除型社会」への移行は、1980年代のバブル経済の時期を挟んで、1990年代後半から本格化していったと考えられる。この1990年代後半は、金融機関の破綻や雇用の不安定化などが一気に表面化した時期であり、「ひきこもり」が新たな社会問題として提起された時期でもある。

### (1) 排除型社会と「透明な排除」

Young (1999) によると「排除型社会」の特徴は、人々を排除することばかりにあるのではなく、他方では過剰に包摂しようとする側面もあるという点にある。現代社会は消費社会や情報化の進行によって価値を一元化して行き、人々を単一の価値観に飲み込んでいく傾向がある。しかし、社会的な価値観を過剰に内面化しているにもかかわらず、それを実現する手段が奪われているため、その差が「相対的剥奪感」を生み出していく。欧米の社会では、それが犯罪につながるというのである。

このような、価値観へ過剰に包摂しつつも生産手段からは排除していくという図式は、第4節で「透明な排除のプロセス」と呼んだものと合致する。「ひきこもり」の若者たちは、学校や教室からは排除されながらも、学校的な価値観には過剰に包摂されていた。彼らは「ふつうであること」「役に立つこと」といった社会規範を体現すべく強迫的になっているにもかかわらず、それを体現できないことに対して劣等感を深めていたのである。また、彼らは通信制高校などに在籍しているものの、実際はほとんどそれを利用することができないままの者も少なくなかった。ここでもまた、表面的には「学籍」という形で学歴社会にまだ包摂されているように見えながら、実質的にはすでに排除されているという二重構造がある。ただし、Youngの描き出す排除される側の人々が犯罪と親和的であるのに対して、「ひきこもり」の若者たちの場合はみずから社会の表舞台から退場していくという点では大いに異なっている。

### (2) 異質性の排除

また、Young (1999) は一元化された市場的価値観に自ら包摂されていく機制について指摘する一方、むしろ異質性を際立たせ、排除される者に備わった本質的な特徴として帰属させて、科学的な根拠をもとに排除していくという「本質化」の機制についても指摘している。

すでに石川 (2007) がYoungを参考にしつつ指摘しているが、「ひきこもり」という否定的なラベリングの下に、得体の知れない否定的属性を押し付けられ、社会から排除されていく側面のことである。そもそも斎藤 (1998) が「(社会的) ひきこもり」という概念を提示し、「不登校その後」という生き方の問題(実存的問題)を、医療的な問題へと移行させてしまったことはまさにこれに当てはまるといえるだろう。さらに近年、ひきこもりの若者たちに「発達障害」や「人格障害」というようなさまざまな精神保健的なラベリングが関連づけられているが、このよう

な動きも「本質化」の機制として捉えることができる。

## 2 社会的領域の喪失と個人化の進行

Young (1999) は包摂型社会から排除型社会への移行において、「非寛容zero tolerance」の政策が横行し、不安や異質性を包摂する容量が極端に低下していくと述べている。そして、それらへの対処が個人の責任に帰されるようになっていくことを指摘している。それはある意味で「社会的領域の喪失」と表現することができる。

このような理解に立てば、2000年前後から急速に「ひきこもり」が問題化していき、また前後して「発達障害」についても問題視されるようになっていったことの必然性が理解できる。つまり、以前の包摂型社会においては、発達障害やその他の心理的リスクを有していた人々もなんらかの社会的セーフティネットに助けられ、ひきこもりという状態に陥らずに済んでいたが、1990年代後半からのセーフティネットの崩壊によって、個人的リスクが顕在化していき、リスクに対処する方策の一つとして「ひきこもり」という状態に陥ってしまう人が出現していったと考えられる。この「社会的領域の喪失」は、発達障害を有する人々だけではなく、なんらかの「異質性」というリスクを抱えている人々すべてのもことで作用したことが予想される。

つまり、「ひきこもり」という現象は、なんらかの理由（発達障害、いじめ、不登校など）によって自己を発達させる機会が阻まれた若者たちが、脆弱な自己を崩壊から守るために、過剰にリスクをコントロールすることによって生じていると考えることができるであろう。

しかし、彼らの抱えているリスクの多くは生まれもつての特性であったり社会的な要因であるため、個人ではコントロールしきれないものであるにもかかわらず、「ひきこもり」の若者

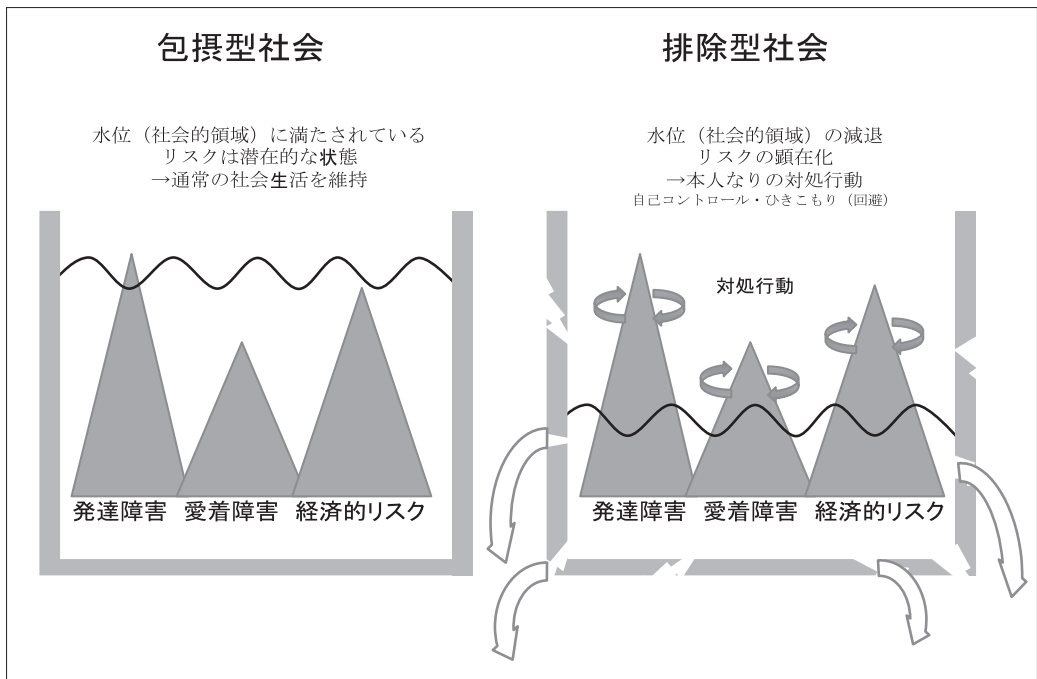


図3 包摂型社会と排除型社会における個人的リスクの現れ (村澤 2017aを改変)

たちはそれに「自己責任」で対処しようとしてきたということもできる。これまで見てきたように、彼らの多くが体験してきた「不登校」の背景には学校空間の質的な変化があると考えられるが、同じく彼らの多くが体験してきた「いじめ」においてもそれは同じである。また、彼らはそのような不運に見舞われながらも、そこから脱出すべく支援を求めていくのであるが、支援を受けることが孤立への道を選択することにつながる場合も多かった。

## 終節 「ひきこもり」支援のゆくえ

### 1 支援観の再構築に向けて

近年、ひきこもりの若者への支援について社会的スキルの向上を主眼にした枠組みが提示されているが、本稿を通して指摘してきたことは、「ひきこもり」という現象が、社会においてリスクを受容する余裕が失われているという意味での「社会的な領域の喪失」と、リスクに対して個人の努力によって対処しなけれならぬという考え方が内面化されてきているということである。

先の図3に示したように、包摂型社会から排除型社会への移行において、社会的領域が減退(図では水位の低下)していくことによって、それまで潜在化していた個人のリスクが「問題」として表面化していったと考えられる。このような状況に対して、現在の「ひきこもり」に対する政策や心理学的理解の枠組みはこの問題を治療や訓練という自助努力にとって克服することを強いている。図3に示した「水位」の比喻を用いるならば、リスクを見えなくするように水位を下げないで、表面化したリスクに対してのみ物理的に対処しているといえるであろう。いみじくも湯浅(2008)が貧困問題において情緒的な意味での「タメのなさ」を指摘したように、水位を上げることや「ダムを作る」ことこそが今求められていることであると考えられる。あるいはそのような「溜まり場」としての居場所をどのように作り出していくのが課題になるといえるであろう。

しかしながら、現実の支援枠組においては自律的なコントロールを身につけていくことが至上の課題として認識されてきている。第1節で、「ひきこもり」においては心理的側面と社会的側面が「社会的スキル」という領域によって奇妙につながり合われているように思われると述べたが、これと同様のことを、平井(2015)は現在のわが国における薬物事犯者に対する刑事施設における処遇とそこで援用される認知行動療法をめぐる統治のテクノロジーについて指摘している。そして平井は、そこで目指されている「社会的なものの自己コントロール」に対置される方向性として、『自己コントロール』の社会化」という方向性を提示している。平井はその中身については具体的に示していないが、これを筆者なりに読み解くならば、自己責任のみによってリスクのコントロールがなされるのではなく、社会的なセーフティネットの多様化によって結果的に個人のリスクが分散されることを狙ったものであると考えられる。このような視点は、排除型社会の論理を突き崩すような支援を構築する上で重要なものであると思われるが、その具体的な実践への展開については、今後の研究課題としていきたい。

## 2 新たな課題としての「大人のひきこもり」

また先述したように、2010年頃から、「ひきこもり」の定義の不十分さも指摘され始めている。それまで「ひきこもり」は一般的には若年層の問題と考えられていたが、中高年の「ひきこもり」が注目されるようになってきたこと、また従来は、就労経験がないことが「ひきこもり」という問題を考える上での暗黙の了解になっていたが、就労経験を経て「ひきこもり」に至る例についても注目されるようになってきたことなどから、就労経験を経ない若年層を中心する「ひきこもり」と就労経験のある中高年を中心とする「ひきこもり」を分離して考える必要性が指摘されている。

このような就労経験群について検討することは、本稿の範囲をこえるため、今後の検討課題としていきたい。

### 付記

本稿は2017年3月に受理された学位論文（村澤 2017a）の第1章と終章を中心にして大幅に再構成したものである。学位論文を執筆するにあたってご指導くださいました北海道大学教育学研究院名誉教授の間宮正幸先生に深く感謝を申し上げます。また、同じく北海道大学教育学研究院の加藤弘通先生、川田学先生、大阪教育大学の白井利明先生には副査の立場から多くの貴重なご意見をいただきました。記して感謝申し上げます。

### 引用文献

- American Psychiatric Association (APA) (2013). *Diagnostic and statistical manual of mental disorders. 5th Edition DSM-5*. Washington, D. C: American Psychiatric Press. 日本精神神経学会監修 (2014). DSM-5 精神疾患の診断・統計マニュアル. 医学書院.
- 朝倉聡 (2012). 自閉症スペクトラムと社会不安障害. 児童青年精神医学とその近接領域, 53, 504-509.
- 浅野千恵 (1996). 女はなぜやせようとするのか——摂食障害とジェンダー. 勁草書房.
- Blos, P. (1962). *On adolescence: a psychoanalytic interpretation*. New York: The free press of Glencoe.
- 野沢栄司 (訳) (1971). 青年期の精神医学. 誠信書房.
- 藤縄昭 (1972). 自我漏洩症状群について. 土居健編. 分裂病の精神病理 東京大学出版会.
- 中村敬 (2007). 社会不安障害とは 北西憲二・中村敬 (編). 森田療法で読む社会不安障害とひきこもり, 白揚社, pp.15-41.
- 藤山直樹 (2001). ひきこもりと人格障害 現代のエスプリ. 至文堂403, pp.78-85.
- Gabbard, G. O. (1994). *Psychodynamic Psychiatry in Clinical Practice The DSM-IV Edition*. American Washington, D. C: Psychiatric Press.. 館哲朗監 (訳) (1997). 精神力動的な精神医学——その臨床実践 「DSM-IV版」(3) 臨床編II 軸障害. 岩崎学術出版社.
- 玄田有史・曲沼美恵 (2004). ニート——フリーターでもなく失業者でもなく. 玄冬舎
- Gillberg, C. (2002). *A guide to Asperger syndrome*. Cambridge: Cambridge University Press, 田中康雄監修 (2003). アスペルガー症候群がわかる本. 明石書店.
- Herman, J. L. (1992). *Trauma and Recovery*, New York: Basic Book. 中井久夫訳 (1996). 心的外傷と回復. みすず書房.

- 平井秀幸 (2015). 刑務所処遇の社会学——認知行動療法・新自由主義的規律・統治性. 世織書房.
- Holzman, L. (2009). *Vygostky at Work and Play*. London: Routledge. 茂呂雄二 (訳) (2014). 遊ぶヴィゴツキー——生成の心理学へ. 新曜社.
- 本田由紀 (2006a). 多元化化する「能力」と日本社会——ハイパー・メリトクラシー化のなかで NTT出版
- 本田由紀 (2006b). ニートっていうな!. 光文社.
- 本城秀次 (1988). 家庭内暴力を伴う登校拒否児における「いじめられ」体験について. 児童青年精神医学とその近接領域, 29, 127-135.
- 堀井俊章・小川捷之 (1995). 思春期・青年期における対人恐怖意識の時代的推移. 上智大学心理学年報, 19, 75-84.
- 石川良子 (2007). ひきこもりの〈ゴール〉——「就職」でも「対人関係」でもなく. 青弓社.
- Kafka, F. (1915) *Die Verwandlung*, Kurt Volf Verrug; Leipzig, 高橋義孝訳 (1952) 変身 新潮社
- Kafka, F. (1926) *Das Schloß*, 前田敬作訳 (1971) 城 新潮社
- 笠原嘉・藤縄昭・関口英雄・松本雅彦 (1972). 正視恐怖・体臭恐怖——主として精神分裂病との境界例について. 医学書院.
- 加藤まどか (2004). 拒食と過食の社会学——交差する現代社会の規範. 岩波書店.
- 衣笠隆幸 (1999). 「ひきこもり」とスキゾイドパーソナリティ——スキゾイドの病理学的研究の歴史. 精神分析研究, 43(3), 101-107.
- 木谷岐子 (2015). 自閉症スペクトラム障害の成人当事者が抱える「自分」——M-GTAを用いた質的研究. 北海道大学大学院教育学研究院紀要, 122, 1-25.
- 近藤直司 (2010). 思春期ひきこもりにおける精神医学的障害の実態把握に関する研究 厚生労働科学研究費補助金こころの健康科学研究事業 思春期ひきこもりのもたらす精神科疾患の実態把握と精神医学的治療・援助システムの構築に関する研究平成21年度総括・分担研究報告書. 67-102.
- 近藤直司 (2013). ひきこもりと発達障害. 児童青年精神医学とその近接領域, 54, 253-259.
- 厚生労働省 (2003). 一〇代・二〇代を中心とした「ひきこもり」をめぐる地域精神保健活動のガイドライン: 精神保健福祉センター・保健所・市町村でどのように対応するか・援助するか.
- 厚生労働省 (2010). ひきこもりの評価・支援に関するガイドライン.
- 文部省 (1992). 登校拒否(不登校)問題について——児童生徒の「心の居場所」づくりをめざして. 学校不適應対策調査研究協力者会議最終報告書. 文部省中学校課内生徒指導研究会(編). 今,登校拒否を考える.
- 文部省 (1996). 生徒指導上の諸問題の現状と文部省の施策について.
- 森田正馬 (1932). 赤面恐怖症 (又は対人恐怖) と其療法. 神経質, 3, 172-184.
- 森田洋司 (2010). いじめとは何か 教室の問題、社会の問題. 中公新書.
- 村澤和多里 (2003) ひきこもり傾向のある対人恐怖症青年との対話——つながりつつ独りであるということ. 北海道大学大学院教育学研究科教育臨床心理学研究紀要, 5, 169-180.
- 村澤和多里 (2013) 『『ひきこもり』における透明な排除のプロセス』札幌学院大学人文学会紀要94, 81-101.
- 村澤和多里 (2017a) 「ひきこもり」についての理解と支援の新たな枠組みをめぐる——心理-社会的な視点からの探求. 博士学位論文 (北海道大学).
- 村澤和多里 (2017b) 札幌学院大学人文学会紀要, 102, 111-135.
- 村澤和多里・山尾貴則・村澤真保呂 (2012). ポストモラトリアム時代の若者たち——社会的排除を超えて. 世界思想社.
- 武藤清栄 (2001). ひきこもりの概念の変遷とその心理. 現代のエスプリ, 403, 35-44. 至文堂

- 鍋田恭介 (1997). 対人恐怖・醜形恐怖. 金剛出版.
- 鍋田恭介 (1999). 学校不適応とひきこもり——変わりゆく子どもたちの悩みとその対応. *こころの科学*, 87, 20-31.
- 内閣府 (2010). 若者の意識に関する調査 (ひきこもりに関する実態調査).
- 中村敬 (2000). 対人恐怖/社会恐怖の精神病現——多次元的モデルによる考察臨床精神医学, 29, 1093-1098.
- 中村敬 (2007). 社会不安障害とは 北西憲二・中村敬 (編). 森田療法で読む社会不安障害とひきこもり, 白揚社, pp.15-41.
- 西田博文 (1968). 青年期神経症の時代的変遷—心因と病像に関して—児童青年精神医学とその近接領域, 9, 25-252.
- 荻野達史 (2007). 相互行為儀礼と自己アイデンティティ——ひきこもり経験者支援施設でのフィールドワークから. *社会学評論*58, 2-20.
- 小此木啓吾 (2000). ひきこもりの社会心理的背景 狩野力八郎・近藤直司 (編). 青年期のひきこもり——社会心理的背景・病理・治療援助. 岩崎学術出版会.
- 斎藤環 (1998). 社会的ひきこもり 終わらない思春期. PHP研究所.
- 斎藤環 (2003a). 心理学化する社会. PHP研究所.
- 斎藤環 (2003b). ひきこもり文化論. 紀伊國屋書店.
- 佐藤修策 (1987). 「登校拒否」再考. *教育心理*, 35, 5-11.
- 佐藤由宇・櫻井未央 (2010). 広汎性発達障害者の自伝に見られる自己の様相. *発達心理学研究*, 212, 147-157.
- 関水徹平 (2016) 「ひきこもり」経験の社会学. 左右社.
- 塩倉裕 (2002) 「引きこもり」を見る視点. *高校生活指導*, 152, 6-13
- Simonoff, E., Pickles, A., Charman, T., Chandler, S., Loucas, T. and Baird, G. (2008). Psychiatric disorders in children with autism spectrum disorders: Prevalence, comorbidity, and associated factors in a population-derived sample, *Journal of the American Academy of Child and Adolescent Psychiatry*, 47, 921-929.
- 杉山登志郎 (2002). 広汎性発達障害とひきこもり. 斎藤環 (編). ひきこもりと思春期. 星和書店, pp.85-95.
- 杉山登志郎 (2007). Asperger症候群の周辺. 児童青年精神医学とその近接領域, 49, 243-258.
- Sullivan H. S. (1953). *The Interpersonal theory of psychiatry*. New York: W. W. Norton & Company.
- 中井久夫他 (訳) (1990). 精神医学は対人関係論である. みすず書房.
- 高山龍太郎 (2008). 不登校から「ひきこもり」へ. 荻野達史・川北稔・工藤宏司・高山龍太郎 (編). 「ひきこもり」への社会的アプローチ——メディア・当事者・支援活動. ミネルヴァ書房, 24-47.
- 田中康裕・穂刈千恵・福田周・小川捷之 (1994). 青年期における対人不安意識の特質と構造の時代的推移. *心理臨床学研究*, 12, 121-131.
- 鑓幹八郎 (1989). 登校拒否と不登校——神経症的発言から境界例および登校無関心型へ. 児童青年精神医学とその近接領域, 30, 260-264.
- 東京都 (2008). 実態調査からみるひきこもる若者のこころ: 平成19年度若年者自立支援調査研究報告書.
- 植元行男・村上靖彦・藤田早苗 (1967). 思春期における異常な確信体験について (その1) ——いわゆる思春期妄想症について. 児童精神医学とその近接領域, 8, 155-167.
- van der Kolk, B. A., McFarlane, A. C., Weissseth, I. (Eds.) (1996). *Traumatic Stress*, New York: The Gillford Press.
- 西澤哲監訳 (2001). *トラウマティック・ストレス——PTSDおよびトラウマ反応の臨床*

と研究のすべて。誠信書房。

若林慎一郎 (1992). 私 (若林慎一郎) の児童精神医学の歩み. 児童青年精神医学とその近接領域, 33, 1-11.

Wertch, J. V. (1998). *Mind as Action*. New York: Oxford University Press. 佐藤公治・田島信元・黒須俊夫・石橋由美・上村佳世子 (訳) (2002). 行為としての心. 北大路書房.

Williams, D. (1992). *Nobody nowhere*. London: Transworld Publishers. 河口万理子 (訳) (1993). 自閉症だった私へ. 新潮社.

Wink, P (1991). Two faces of narcissism. *Journal of Personality and social Psychology*, 61, 590-597.

山下格 (1970). 対人恐怖について. 精神医学, 12, 5-14.

Young, J. (1999). *The Exclusive Society: Social Exclusion, Crime and Difference in LateModernity*, California: Saga Publication. 青木秀男・伊藤泰郎・岸政彦・村澤真保呂訳 (2007). 排除型社会——後期近代における犯罪・雇用・差異. 洛北出版.

湯浅誠 (2008). 反貧困——「すべり台社会」からの脱出. 岩波書店.

## “Hikikomori” as a Psycho-Social Phenomenon On the Life Experiences of Adolescents in the Late 1990s.

Watari MURASAWA

### Key Words

“hikikomori”, vulnerability, self-control, the exclusive society

### Abstract

The phenomenon known as “hikikomori” began to garner attention as a psycho-social issue starting in the late 1990s. The objective of this paper was to outline the respective psychological and sociological aspects of “hikikomori”, and to present a framework for comprehensively understanding those aspects.

On the psychological side, connections have been made with narcissistic and schizoid personalities, but in recent years, a relationship with developmental disorders has also been gathering attention. The characteristics that they have in common are “vulnerability of the self” and “excessive self-control.” As for the sociological side, in Japan, the following things bear mentioning: qualitative changes in intimacy during puberty, progressive social exclusion mechanisms, and changes in the employment structure.

Finally, with reference to J. Young’s (1999) “exclusive society” theory, I presented a framework to understand the psychological and sociological aspects comprehensively.